

国語教科書のなかの土佐日記

——「門出」の授業案を中心に——

田 中 智 子

【論文概要】

『土佐日記』は高校の「国語総合」の教科書の多くに採録される古典の定番教材の一つであるが、必ずしも古典の初学者に親しみやすい内容の作品とはいえない。現行の国語教科書を用いつつ、生徒に『土佐日記』への興味をもたせるような授業を行うためには、副教材を活用するなど工夫が必要であろう。また、高校での授業において最新の『土佐日記』研究の成果を取り入れる必要はないにせよ、諸研究が明らかにしてきた『土佐日記』のもつ虚構性の問題などをふまえて授業を行うことで、生徒に、単なる日々の実録としての「日記」としてではなく、すぐれた「日記文学」としての『土佐日記』の魅力・おもしろさを伝えることができると考える。

【キーワード】 土佐日記 門出 国語総合 国語教科書 古典教育

はじめに

二〇一五年に行われた和歌文学会第六十一回大会¹では、「和歌を学び、教えるということ」と題した、和歌教育についてのシンポジウムが開催された。石塚修氏・渡辺健氏・渡部泰明氏の三名のパネリストによる提言は、いずれも刺激的なものであり、発表後のフロアとの質疑応答も含めて実に有意義なシンポジウムであったと思う。初等・中等教育における古典教育のあり方についての議論は、和歌文学会のみならず古典文学に関する他の学会や研究会においても活発化しているようである。また近年、古典教育に関する書籍や初学者向けの古典文学に関する書籍も多数出版されている²。教育界・研究界双方において、「今後、古典教育はどうあるべきか」

という問題への関心はいよいよ高まっているといえよう。

こうした学界の動向の背景には、昨今の古典教育を取り巻く環境の目まぐるしい変化がある。二〇〇九年の学習指導要領改訂によって、小学校でも古典の授業が本格的に導入されたことにより、初等・中等教育を通じて古典の授業が行われることとなった。一方で、少子化に伴い児童・生徒の数は減少の一途を辿っているが、それは教科書の発行部数の減少とも直結しており、そのために教科書の作成に際しても様々の困難が生じているという³。古典教育をめぐる環境は必ずしも明るいとはいえないが、現状である。

しかしまた、古典教育のあり方に関わる議論の活発化は、そのような外的要因ばかりによるものではあるまい。むしろその根本には、「生徒や学

生に古典のおもしろさを伝えたい」、「古典に興味をもつ若い人を増やしたい」という、教育者・研究者の、率直かつ切実な願いがあると思われるのである。稿者もまた、若い人たちに古典の魅力を伝えたいと願い、その方法を模索する教員の一人である。

上記のような古典教育に関する学界の動向をふまえたうえで、本稿では、『土佐日記』⁴を例にとつて、高校での古典の授業の方法について具体的に提案してみたい。ただし、もちろん、古典を授業でどのように教授するかについては、教員がその古典作品をどのように解釈しているかによるところも大きいだろう。それゆえ授業の取り組み方には様々な方法がありえようし、またそうあるべきだとも思う。本稿はあくまでも、稿者の大学での実践例⁵に基づき、『土佐日記』の教授法についての一提言である。

一 「国語総合」の教科書における『土佐日記』

『土佐日記』は、土佐守の任を終えた紀貫之が、承平四年（九三四）十二月二十一日に土佐国を出発し、翌年の二月十六日に都の自宅に帰るまでの日々の出来事を描いた旅日記である。高校一年生の必修科目である「国語総合」の教科書の多くに採録されており、高校古典の定番教材の一つとなっている。

しかしながらもちろん、そのことは、『土佐日記』が古典の初学者にとつて解しやすすい、親しみやすい作品であることをただちに意味するわけではない。むしろ『土佐日記』には、現在でもなお解釈が分かれている難解な表現が散見し、容易には現代語訳がたいような箇所も少なからず存する。それにもかかわらず『土佐日記』が高校古典の定番教材として採用され続けてきたのはなぜだろうか。

その理由は様々に考えられるが、まず第一に、同日記が「仮名文による最古の日記文学」であること、作者が「古今和歌集」撰者の一人⁷の紀

貫之であることなどといった、その文学史的意義が挙げられよう。また、同日記が、土佐国から都へ帰るまでの旅の出来事を綴った「旅日記」という明確な枠組みを有していることが、初めて日記文学に接する生徒にとって比較的馴染みやすい教材と捉えられてきた一因であるとも考えられる。

さて、本稿の執筆時点（二〇一七年九月）においては、九社の教科書発行会社により、全二十四冊の「国語総合」の教科書が出版されている。そのうち十八冊に『土佐日記』が採録されているが、日記中のどの箇所を取り上げているかには教科書間で差異がある。そこでまず本節では、各教科書における『土佐日記』の採録状況を概観することとしたい。

次表は、現行の「国語総合」の教科書（二〇一七年度以降に高校に入学した生徒が使用するもの）を対象に、それぞれが『土佐日記』中のどの記事⁸を採録しているかをまとめたものである。

発行会社	教科書名・教科書番号	「土佐日記」の採録箇所	他の日記の採録状況
東京書籍	新編国語総合	332	ナシ
	精選国語総合	333	馬のはなむけ・羽根といふ所 帰京
三省堂	国語総合 古典編	335	馬のはなむけ・羽根といふ所・阿部仲麻呂・帰京
	高等学校国語総合 古典編 改訂版	337	門出・忘れ貝・帰京
教育出版	精選国語総合 改訂版	338	門出・忘れ貝・帰京
	明解国語総合 改訂版	339	ナシ
大修館書店	精選国語総合 古典編	341	門出・忘れ貝・住吉の明神・帰京
	新編国語総合	343	ナシ
新編国語総合 改訂版	国語総合 古典編	345	門出・忘れ貝・帰京
	精選国語総合 改訂版	346	門出・帰京
新編国語総合 改訂版	347	ナシ	ナシ

発行会社	教科書名・教科書番号	『土佐日記』の採録箇所	他の日記の採録状況
数研出版	改訂版 国語総合 古典編	門出・忘れ貝・帰京	ナシ
	改訂版 高等学校 国語総合	門出・帰京	ナシ
	新編国語総合	ナシ	ナシ
明治書院	新 精選国語総合 古典編	門出・帰京	ナシ
	新 高等学校国語総合	門出・帰京	ナシ
筑摩書房	精選国語総合 古典編 改訂版	門出・亡き児をしのぶ・帰京	更級日記
	国語総合 改訂版	門出・亡き児をしのぶ・帰京	更級日記
第一学習社	高等学校 改訂版 新訂国語総合 古典編	門出・亡児・帰京	ナシ
	高等学校 改訂版 国語総合	門出・亡児・帰京	ナシ
	高等学校 改訂版 標準国語総合	門出	ナシ
	高等学校 改訂版 新編国語総合 古典編	ナシ	ナシ
桐原書店	新 探究国語総合 古典編	門出・かしの雪・帰京	ナシ

この表からは、教科書への『土佐日記』の採録状況について、次のようなことが読み取れよう（なお以下、各教科書は書名ではなく発行会社名＋教科書番号のかたちで表すこととする。例えば東京書籍の『新編国語総合』は東京書籍332と記す）。

- ① 『土佐日記』を採録する十八冊すべてが、日記の冒頭の記事を採録している（見出しは「門出」もしくは「馬のはなむけ」。十二月二十一日条・二十二日条を取り上げる教科書が多いが、二十四日条まで取り上げるものもある）。
- ② 教育出版341・第一学習社361の二冊を除く計十六冊が、日記の最末の記事を採録している（見出しは「帰京」。二月十六日条）。
- ③ 十一冊が、「亡き子」に関わる記事を採録している（「羽根といふ所」、「忘れ貝」、「亡き児をしのぶ」、「亡児」。ただし日記末尾の「帰京」にも亡き子に関する記述がみられるが、それを除いての数字である）。

④ 『土佐日記』以外の日記文学として『更級日記』を採録する教科書が三冊あるが、それらはすべて『土佐日記』を併せ採録している。

④は結局、「日記」という文学ジャンルを取り上げる「国語総合」の教科書が、もれなく『土佐日記』を教材として選んでいるということでもある。これはとりもなおさず、『土佐日記』が日記文学の代表作として生徒に認識されるであろうことを意味しており、その点でも『土佐日記』をどのように授業で扱うかは極めて重要な問題であると考えられよう。

もとより、高校の古典における『土佐日記』の授業をよりよいものにしてゆくためには、日記中どの記事を教材として取り上げるべきかという観点から、教科書の内容を総合的・体系的に再検討する必要がある。しかしながらこの度の論考の目的は、現行の教科書の教材を活かすつどのような授業を行うことができるかということの提案にあるため、本稿ではひとまず教科書の内容の見直しの問題については言及しないこととする。上記のことを念頭におきつつ、次節以降では、生徒に『土佐日記』のおもしろさ、魅力を伝えるための具体的な授業の方法について、稿者なりの提言を試みたい。

二 「門出」(一)

前節の①で述べたように、『土佐日記』を取り上げる教科書はすべて日記の冒頭部分を採録している（「門出」または「馬のはなむけ」。左に、日記冒頭の十二月二十一日条・二十二日条を掲げよう（なお以下、『土佐日記』本文の引用は新日本古典文学大系による）。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむ、とて、するなり。
 その年の十二月の二十日余り一日の日の戌の刻に、門出す。そのよし、いさ、かに物に書きつく。

ある人、県の四年五年はてて、例の事どもみなし終へて、解由など

取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年来よく比べつる人々、なむ、別れ難く思ひて、日しきりに、とかくしつ、の、しるうちに、夜更けぬ。

廿二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。藤原のときぎね、船路なれど、むまのはなむけす。上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれ合へり。

さて、各教科書では原則として、古典本文のあとに、その文章についての設問がいくつか示されている。例えば第一学習社361では「門出」の本文のあとに「学習」の見出しを立て、次の三つの課題を掲げている。

□ 本文中から、事実をほかして書いている部分を抜き出してみよう。

□ 「船路なれど、むまのはなむけす」という表現のおもしろさを考えてみよう。

□ 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」の「なる」「なり」について、違いがわかるように、それぞれ文法的に説明してみよう。

□ は「その年」や「ある人」といった臚化表現への、□ は日記中にしばしば出てくる諧謔表現への注意を喚起するものである。また□ は冒頭の一文を例に、伝聞推定の助動詞「なり」と断定の助動詞「なり」の違いを学ばせようとするものであろう。他の会社の教科書でもおおむね同様の設問が掲げられている。それぞれに有意義な課題であるが、しかし、実際の授業では、これらの設問に対する解答を示すだけでは不十分であるとも思われる。例えば□の「事実をほかして書いている部分を抜き出してみよう」という課題は、生徒が古文の表面的な意味を理解できているかどうかの確認をするためには有効だが、それだけで『土佐日記』という作品への理解が深まるとはいいがたい。生徒の興味関心、あるいは学力レベルを考慮したうえで話ではあるけれども、ここでは更に一歩踏み込んで、臚化

表現を用いることの意味や、それによる表現上の効果を考えるような学習を授業に組み込む必要があると思う。

これと同様のことが□についてもいえるだろう。『土佐日記』を単なる事実の記録としての「日記」ではなく、多分に虚構を含んだ「日記文学」として読み解くためには、この「男もすなる日記といふものを、女もしてみむ、とて、するなり」という冒頭の叙述をいかに解するかが鍵となる。この問題については今日においてもなお様々の見解が提出されており、¹⁰ 定解をみないが、『土佐日記』という作品の本質にかかわる重要な問題であることは間違いない。この問題に唯一の「正解」を提示することは極めて困難であるが、むしろそれゆえにこそ、高校の授業で、この女性仮託の問題について生徒と意見を交わす機会を設け、作品理解の促進を図ることが重要であろう。

とはいえ、古典を本格的に学び始めたばかりの高校一年生にとつて、作者が書き手を女性に仮託することの理由や、出発の年などがあてはかして表現されていることの意味を考えるのが、かなり困難な課題であることもまた確かであろう。そこで次節では、上記の問題に生徒自身が主体的に取り組めるような学習環境を生み出す方法について、具体的に考えてみたい。

三 「門出」(二)

生徒に『土佐日記』の文学としての特質を考えさせるための教材の工夫として、第一学習社359・360・361にみえる「古典のしるべ4 「日記」と「日記文学」と題したコラムは注目に値する。当該コラムには概略以下のことが記されている。平安時代の男性貴族は、子孫に先例を伝えることを主たる目的として漢文体の日記を記した。一方で平安時代には仮名で書かれた日記もあり、これは主に女流作家が書いたので「王朝女流日記」とも呼

ばれる。それは人生のある時期における体験を振り返って記した回想録、自叙伝の趣をもち、「日々の記録としての日記」とは性質が異なる文学作品である。その仮名による日記文学の元祖が、貫之が女性になりすまして書いた『土佐日記』である。『土佐日記』は門出から帰京までの五十五日間の記録を、何も動きがない日も含めて一日も漏らさずに記すが、「これは、『具注暦』のような官製の暦に毎日日記をつけていた男性官僚の習慣ゆえのものである。作者は「女性のふりをして仮名で書いたけれども、やはり男性的な日記の形式にとらわれたのである」。

このコラムには、生徒の『土佐日記』への理解を深めるための、様々の工夫が凝らされている。もとより現行の「国語総合」の教科書では、他の教材との兼ね合いの問題もあるのだろうが、必ずしも『土佐日記』に多くのページが割かれているとはいえない。特に第一学習社361などは冒頭の「門出」だけを採録しているが、当該箇所だけを取り上げて『土佐日記』の魅力全般を生徒に伝えるのは容易ではなからう。先掲のコラムは、そうした教材の制約を補うことを目的として収録されたものとおぼしい。『土佐日記』を単なる実録としての「日記」ではなく、あくまでも「日記文学」として読み解くことの重要性を説くものであり、教科書編纂者による工夫の跡が窺われる。

ただし一方で、文学史的知識をコラムの文章によって学ぶだけでは、生徒が漢文日記と仮名日記との差異を現実的なものとして捉えにくいのではないかと懸念も残る。如上の問題意識から、生徒が『土佐日記』により関心をもち、理解を深められるような授業形態の一例として、男性がもつた漢文日記の影印と、『土佐日記』の影印とを副教材として用いることを提案したい。ひとつくちに漢文日記といっても色々あるが、例えば『御堂関白記』を用いてみてはどうであろうか。『土佐日記』よりも成立年代は下がるが、藤原道長の自筆本が残っている点で資料的価値が高く、また生徒も道長のことは中学校の歴史の授業で習っているはずなので、彼らの関

心を惹きやすいと考える。

さて、この取り組みのねらいは大別して二点ある。一点目は、古典の写本がどのようなものであるかを知ることを通じて、生徒に古典への親しみと関心をもってもらうことにある。近時、写本・版本や影印本を用いた授業の実践例が複数報告されており、くずし字を通じた授業においては、適切な教材を用いることで生徒の古典への関心を高めようとの指摘もなされている。またそもそも『土佐日記』は、紀貫之自筆本を藤原為家が忠実に書写した本（いわゆる為家本）と、更にそれを臨模した青鉛書屋本が現存する点において極めて注目すべき作品であり、その意味でも、『土佐日記』の写本を影印によって授業で紹介することは意義深いと考える。

なおその際、写本間で本文に異なることをについてもぜひ言及したところである。これまで古典文学作品を教科書の活字を通じて享受してきた生徒にとって、実はその本文が研究者による校訂を受けたものに過ぎないこと、その一方で各写本の間には様々な理由によって生じた本文異同が存することなどは、新鮮かつ興味深い事項として迎え入れられるよう。

この取り組みのねらいの二点目は、漢文日記である『御堂関白記』と、仮名日記である『土佐日記』との間に様々な相違点があることを、まず、視覚的・感覚的に生徒に味わってもらうことにある。更に、発展的な課題ではあるが、両者の叙述の相違点と共通点について生徒に考えさせてみるのも一案だろう。相違点・共通点ともに様々な観点からの指摘が考えられるが、以下、そのなかでも重要と思われることがらをいくつか挙げておく。まず両者の相違点を考えてみたい。『御堂関白記』は漢文体で書かれており、その内容は基本的に日々の行事や政務に関わる備忘録的なものである。一方で『土佐日記』は原則として平仮名で表記された和文で書かれており、その内容は、土佐国を出発して帰京するまでの日々の出来事を記すものである。そこには低い身分の人物や童・女性が多く登場し、更に、折々に詠まれた和歌や、船上から見た風景などに関わる記述も含まれている。

これらは、男性による漢文日記からはおよそ窺いえないモチーフであるといつてよいだろう。

この両者の相違点にこそ、『土佐日記』の書き手が女性に仮託されたことの理由が潜んでいるのではなからうか。この日記が女性の手になるものであることが作品の冒頭で宣言されることで、仮名散文による叙述が可能となった。そしてそのことによつて、子どもや女性が和歌を詠む様や、屏風絵さながらの美しい風景、また書き手が折にふれて抱いた感懐などといった、漢文日記では取り上げられることのない多様なモチーフを描写することが可能となったと考えられるのである。

一方で、二つの日記の共通点として注目されるのは、両者がともに毎日の記録を書き留めた「日録」の体裁をとることである。なぜ『土佐日記』は、仮名による日記という新たな散文学のジャンルを切り開きながら、日録という形式は漢文日記のそれをそのまま踏襲したのだろうか。この問題について、生徒に自由な意見を述べさせてみるのも有意義であろう。

なお当該の問題について、先述の第一学習社のコラムでは、作者が「やはり男性的な日記の形式にとらわれた」ゆえの所為とみなしているが、その見方には再考の余地があると思われる。稿者の見解を述べておけば、『土佐日記』が五十五日間の旅の記録を一日も漏らさず記すのは、漢文日記の「もどき・パロディとして、実録性を装うためのことと考えられるのではなからうか。つまりこれを、作者による、すぐれて戦略的な文学としての叙述の方法であつたと捉えておきたいのである。」

四 「門出」以外の記事の教材としての意義

前節まででは「門出」（馬のはなむけ）と称される日記冒頭部分を中心に論じてきたが、本節では、それ以外の記事の教材としての意義を考えてみたい。

第二節の②・③で述べたように、『土佐日記』を採録する「国語総合」の教科書十八冊のうち、十六冊が日記末尾の「帰京」を、十一冊が亡き子に関わる記事（「羽根といふ所」、「忘れ貝」、「亡き児をしのぶ」、「亡児」）を教材として取り上げている。そもそも亡き子に関する記述は、日記最後の記事（教科書に「帰京」の見出しで採録される、二月十六日条）を含めて日記中に六箇所みられ（十二月二十七日条、一月十一日条、二月四日条、二月五日条、二月九日条、二月十六日条）、日記全体を貫く重要な主題の一つとみなされてきた。多くの教科書が亡き子についての記述を有する記事を採録するのもゆえなしとしない。

しかしながら、亡き子に関する記事を授業で取り上げる際に留意したいのは、近時、この亡き子が実は虚構の存在である可能性が高いとの見方が有力視されていることである。¹³ この点をふまえたうえで、いま、亡き子に関係する記事の一例として、東京書籍333・334が採録する「羽根といふ所」（二月十一日条の一部）の内容を検討してみよう。

今し、羽根といふ所に来ぬ。稚き童、この所の名を聞きて、「羽根といふ所は、鳥の羽根のやうにやある」と言ふ。まだ幼き童の言なれば、人々笑ふ時に、ありける女童なむ、この歌を詠める。

まことに名に聞く所羽根ならば飛ぶがごとくに都へもがなとぞ言へる。男も女も、いかで疾く京へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとはあらねど、げに、と思ひて、人々忘れず。この羽根といふ所問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘る。今日はまして、母の悲しがらるゝことは。下りし時の人の数足らねば、古歌に、「数は足らでぞ帰るべらなる」といふ言を思ひ出でて、人の詠める、

世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな
と言ひつゝ、なむ。

「羽根といふ所」は、「羽根」という地名に興味を惹かれた女童が和歌を

詠む前半部と、亡き子への思いが語られる後半部とから構成されている。眼前の愛らしい女童の姿について亡き子を重ね合わせてしまい、帰京を手放して喜べないでいる母の姿は哀れを誘うが、この条について、『古今和歌集』の歸旅部の四一・四一二番歌を典拠として構成されたものであるとの指摘があることは看過できない。『古今和歌集』の当該歌の本文は次の通りである（なお本文の引用は新編国歌大観によるが、適宜私に表記を改めた）。

武蔵の国と下総の国との中にある隅田河のほとりに至りて、都のいと恋しうおほえければ、しばし河のほとりに下りゐて、思ひやれば限りなく遠くも来にけるかなと思ひわびてながめをるに、渡し守、「はや舟に乗れ、日暮れぬ」といひければ、舟に乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さるをりにしろきとりのはしと足と赤き、河のほとりにあそびけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡し守に、「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」といひけるを聞きて詠める

名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人ありやしやと(四一一)
題しらず よみ人しらず

北へ行く雁ぞ鳴くなる連れて来し数は足らでぞ帰るべらなる(四一二)
この歌は、ある人、男女もろともに人の国へまかりけり、男まかり至りてすなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に、帰る雁の鳴きけるを聞きて詠めるとなむいふ

紙幅の都合上『土佐日記』と『古今和歌集』との関係性について詳述することは避けるけれども、留意したいのは、『土佐日記』の「羽根といふ所」の記事が、『古今和歌集』というプレテキストに基づき巧みに構成されたものであることである。先にも述べたように、亡き子が貫之による虚構であるとすればなおのこと、当該条で語られる亡き子への思いは、この旅日記に通底する「喪失感」¹⁵の象徴としての表現と捉えるべきであろう。

しかしながら、各社の教科書のなかには、日記中で繰り返し語られる亡き子への思いが実は虚構に基づく可能性があることに言及するものはないようである。もちろん、高校の授業においてあまりに複雑な議論に立ち入る必要はなからうけれども、この「亡き子」が虚構の存在である可能性について、授業のなかでごく簡単にでも紹介することは意味のあることではなからうか。それはやはり、『土佐日記』が単なる事実の記録としての「日記」ではなく、事実を再構成し、時に虚構をも含み込みながら作り上げられた「日記文学」であることを解するための一助となると考えるからである。

おわりに

本稿では、「国語総合」の定番教材である『土佐日記』を題材に、現行の国語教科書に基づく具体的な授業の実践法についての稿者なりの試案を述べてきた。もとより、古典の授業をどのように行うかについては、対象とする生徒の立場に関わる要素も大きいと思われる。例えば、その授業が大学入試に古典を必要とする生徒に向けたものであるか否かによって、授業の内容は大きく左右されよう。教育現場では、そのような実情に沿った臨機応変な教授法が求められるはずである。

一方で、これからの古典教育のあり方について考える際に、常に稿者の頭を悩ませてきたのが、教育と研究との関係性である。高校での古典の授業に最新の研究成果を反映させればすぐれた教育が実現できるかといえば、多分そうではあるまい。結局のところ、よりよい古典教育を行うために重要なのは、古典研究の成果をどのように教育現場に還元し、また教育の場での実践例をどのように研究に昇華させていくべきかという問題を、教育者・研究者の双方が不断に考え続けていくことなのだろうと思う。

- 1 二〇一五年十月十日、於岡山大学津島キャンパス。
- 2 例えば梶川信行編『おかしいぞ！国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』（笠間書院、二〇一六年）や土方洋一『古典を勉強する意味ってあるんですか？ ことばと向き合う子どもたち』（青簡舎、二〇一二年）などが挙げられる。また『国語と国文学』（九二—一、二〇一五年十一月）では「教育と研究」と題した特集が編まれた。なお近年、大学での古典教育についても様々な提言がなされている（小林ふみ子・中嶋真也・中野貴文・平野多恵「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ、和歌を演じるワークショップ」（リポート笠間）五八、二〇一五年五月）等。
- 3 教科書協会「教科書発行の現状と課題（二〇一七年度版）」二〇一七年（最終閲覧日 二〇一七年九月二十日、<http://www.textbook.or.jp/publications/>）
- 4 現存伝本はすべて『土佐日記』の表記であり、それゆえ書名を『土佐日記』と表記するべきだとの見解もある（東原伸明「はじめに」『土佐日記虚構論 初期散文学の形成と国風文化』（武威野書院、二〇一五年）に詳しい）。極めて重要な指摘であるが、現行の国語教科書では原則として『土佐日記』の表記が用いられていることをふまえ、本稿では便宜的に『土佐日記』の表記を用いることとする。
- 5 四国大学で二〇一七年度前期に開講された「古文講読」の授業（文学部書道文化学科一年生と日本文学科一年生を対象とする）において、『土佐日記』を取り上げた。その際、日記の影印本（青谿書屋本のもの）を資料として配布したところ、学生からは、『土佐日記』により興味をもてたとの反響があった。特に、書道を専攻する書道文化学科の学生は写本の筆跡等にも関心を寄せたようである。
- 6 東京書籍333の解説。
- 7 第一学習社361の作者解説。
- 8 現行の中学校の国語教科書には、仮名の日記文学を教材として採録するものはない。つまり、中学・高校と古典の授業を受けてきた生徒が初めて授業で習う日記文学作品が『土佐日記』であることとなる。
- 9 例えば第一学習社361の解説には、「土佐守の任期を終えた作者が、国司の館を門出してから帰京するまでの旅日記」とある。また教育出版341・342では『土佐日記』は「日記と紀行」という章の中に、「土佐日記・奥の細道・俳諧」の順で位置付けられている。これは、『土佐日記』と『奥の細道』との紀行文としての性格を重視した構成といえよう。
- 10 諸説については注4東原著書第一章に詳しい。
- 11 加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み—日本近世文学会による出前授業—」（名古屋大学教育学部附属中等学校紀要）六一、二〇一六年十二月）
- 12 『土佐日記』中には「十二日。山崎に泊れり。」「十三日。なほ、山崎に。」のようなごく短い記述のみから成る記事が散見する。神田龍身氏（『土佐日記—言葉と死』「紀貫之 あるかなさかの世にこそありけれ」（ミネルヴァ書房、二〇〇八年））は、『土佐日記』においては「日並という形式自体が対象化され、いかにも日並らしく記されている」と指摘するが、まさしくその通りであろう。
- 13 長谷川政春「土佐日記へのアプローチ」『紀貫之論』（有精堂、一九八四年）等。
- 14 長谷川政春「土佐日記の方法—紀行文学の発生と鞆旅歌の伝統—」（『東横国文学』一四、一九八二年三月）
- 15 注十二神田著書第六章。